

—国内動向—

1 東京都・大阪市中央卸売市場の需給動向（令和7年8月）

【ポイント】

- 気温は、全国各地で過去最高を更新する日があるなど、北・東・西日本でかなり高かった。降水量は、東日本日本海側でかなり多かった一方、沖縄・奄美でかなり少なかった。日照時間は、沖縄・奄美でかなり多かった。
- 東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は10万533トン、前年同月比90.2%、価格は1キログラム当たり314円、同101.3%となった。
- 大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万3386トン、前年同月比88.2%、価格は1キログラム当たり290円、同103.1%となった。
- 野菜の市場価格は、8月中旬頃から上昇した。9月に入っても高値が続き10月まで尾を引きそうであるが、10月後半には落ちついた値になると予想される。

(1) 気象概況

上旬は、旬平均気温が北・東日本でかなり高くなった。特に南高北低の気圧配置となった5日には、関東甲信地方の各地で日最高気温が40度を上回り、群馬県伊勢崎では41.8度と、気象官署等とアメダスを含め、全国での過去最高を更新した。このため旬平均気温は、北・東日本でかなり高かった。旬降水量は沖縄・奄美ではかなり少なかったが、東西日本と九州で線状降水帯が発生して記録的な大雨となり、平年比は東日本日本海側560%、西日本日本海側414%と1946年の統計開始以降で8月上旬として1位の多雨となった。このため旬降水量は東・西日本の日本海側でかなり多く、北日本、東・西日本の太平洋側で多かった。旬間日照時間は、沖縄・奄美では、太平洋高気圧に覆われ、晴れた日が多かったため、多く、西日本では少なかった。

中旬は、旬平均気温は、北日本ではかなり高く、東日本、西日本、沖縄・奄美では高かった。旬降水量は北・東・西日本の日本海側で多い一方、東日本太平洋側では少なかった。期間の初めに前線が東・西日本付近に停滞した影響で、九州北部地方で線状降水帯が発生するなど、東・西日本の日本海側では大雨となった所があった。期

間の半ば以降は、太平洋高気圧が強まり、東・西日本を覆い、また、北日本は高気圧に覆われやすかったが、期間の終わりには前線の影響で日本海側を中心に大雨となった所があった。沖縄・奄美は、太平洋高気圧に覆われて晴れた日が多かった一方、台風第11号や熱帯低気圧の影響も受け、平年並みとなった。旬間日照時間は全国的に多く、北日本太平洋側ではかなり多かった。

下旬は、旬平均気温は、低気圧や前線に向かって暖かい空気が流れ込んだ日もあったため、北・東・西日本でかなり高かった。30日と31日は、関東甲信地方と東海地方で日最高気温が40度以上となる地点があった。平年差は、東日本+3.1度、西日本+2.1度となり、1946年の統計開始以降、8月下旬として1位の高温となった。旬降水量は東日本太平洋側でかなり少なく、平年比は11%で、1946年の統計開始以降、8月下旬として1位の少雨となった。一方、低気圧や前線が数日の周期で北日本付近を通過し、北海道では大雨となった所があり、29日は青森県で線状降水帯が発生した。また、鹿児島県では台風第12号が21日に上陸し、大雨となった。旬間日照時間は東日本でかなり多く、北日本太平洋側、西日本、沖縄・奄美では多かった。

旬別の平均気温、降水量、日照時間は図1の通り。

図1 気象概況

	平均気温			降水量			日照時間		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
北日本					日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側			日本海側 太平洋側
東日本					日本海側 太平洋側				
西日本					日本海側 太平洋側	日本海側 太平洋側			

資料：気象庁「8月の天候」

1 平年を上回る水準				2 平年並み				3 平年を下回る水準			
------------	--	--	--	--------	--	--	--	------------	--	--	--

(2) 東京都中央卸売市場

東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は10万533トン、前年同月比90.2%、

価格は1キログラム当たり314円、同101.3%となった(表1)。

表1 東京都中央卸売市場の動向(8月速報)

品目	入荷量(t)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	100,533	90.2	87.9	314	101.3	112.9	297	313	329
だいこん	6,232	99.8	90.9	121	97.6	105.2	100	115	143
にんじん	5,311	83.9	87.4	161	134.9	114.6	163	157	162
はくさい	4,438	81.0	72.4	102	110.9	106.9	76	117	109
キャベツ類	15,341	95.9	94.5	82	88.0	86.5	81	88	79
ほうれんそう	545	96.0	85.0	942	96.8	110.2	831	920	1,059
ねぎ	2,992	81.4	83.4	424	115.6	119.4	343	482	454
レタス類	8,018	81.0	87.8	229	123.0	126.3	190	219	272
きゅうり	6,882	90.9	86.1	385	96.1	114.7	301	412	432
なす	3,410	98.7	93.7	365	91.1	106.1	328	337	423
トマト	6,302	84.5	78.5	504	119.5	138.2	425	471	600
ピーマン	2,125	86.7	89.8	523	101.1	120.7	620	553	447
さといも	242	93.3	80.3	490	107.7	122.6	588	551	422
ばれいしょ	4,479	88.6	82.4	193	80.6	112.4	195	196	190
たまねぎ	8,214	86.1	85.6	125	88.5	103.5	136	121	120

資料：東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」

注1：平年比は過去5カ年(令和2~6年)平均との比較。

注2：豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの9市場のデータである。

根菜類は、にんじんの価格が、堅調な動きとなり、安値で推移した前年を3割以上上回り、平年を1割以上上回った(図2)。

葉茎菜類は、レタスの価格が中旬以降、下旬に向けて上がり、平年並みであった前年を2割以上上回った(図3)。

果菜類は、トマトの価格が下旬に高騰し、大

幅に高値で推移した前年を2割弱上回り平年を4割近く上回った(図4)。

土物類は、たまねぎの価格が高値で推移した前年を1割以上下回り、平年をわずかに上回った(図5)。

なお、品目別の詳細については表2の通り。

図2 にんじんの入荷量と卸売価格の推移

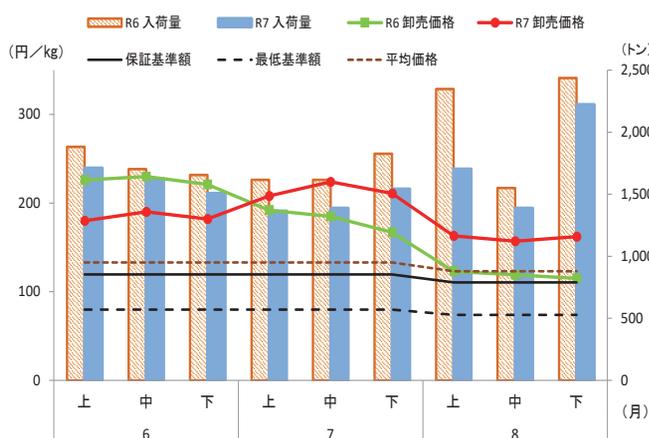


図3 レタスの入荷量と卸売価格の推移

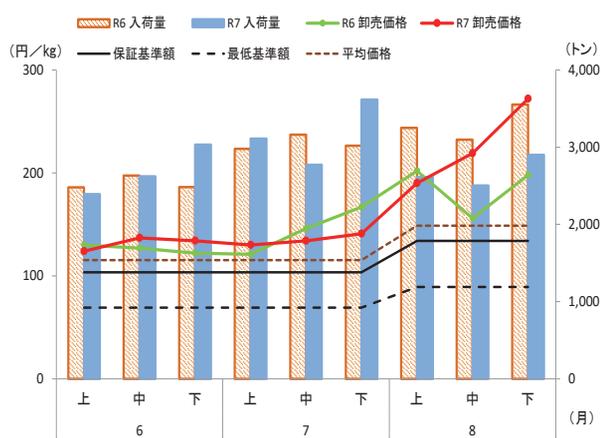


図4 トマトの入荷量と卸売価格の推移

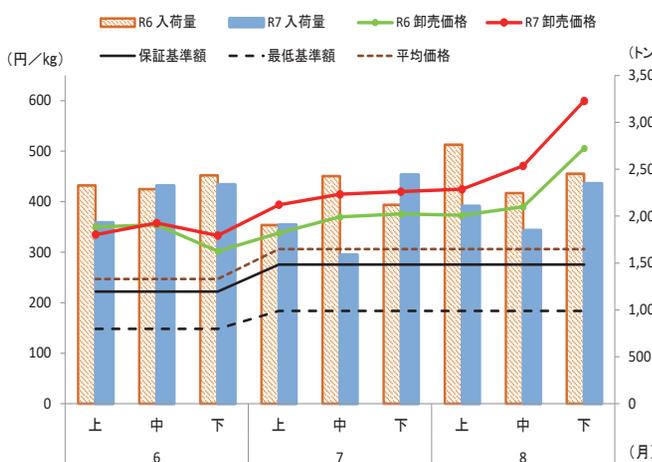
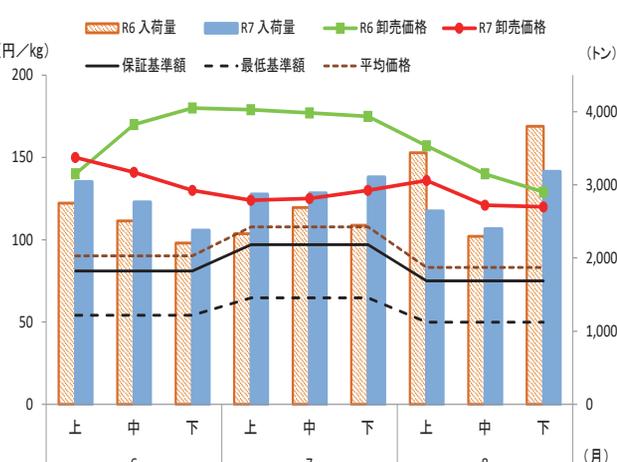


図5 たまねぎの入荷量と卸売価格の推移



資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

※1 卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。

※2 平均価格とは、事業における過去6年間の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。

※3 事業における価格差補給交付金は、平均販売価額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されるとは限らない。

表2 品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	8月の入荷量・価格の動向
根菜類	 だいこん	<p>北海道産、青森産中心の入荷があった。北海道産の作付面積は前年並みで、干ばつの影響で停滞していた生育は回復傾向である。青森産の作付面積は前年並みだが、高温による生理障害の発生が多いほか、また虫害の発生が前年より多い。</p> <p>総入荷量は、やや少なかった前年並みとなり、平年を1割近く下回った。</p> <p>価格は、絶対量不足から下旬に向けて価格を上げ、高めに推移した前年をわずかに下回り、平年をやや上回った。</p>
	 にんじん	<p>北海道産中心の入荷があった。作付面積は前年並みだが、高温・干ばつの影響で肥大が鈍く、生育が停滞している。輸入の中国産は、前年を4割以上上回っている。総入荷量は前年を2割近く下回り、平年を1割以上下回った。</p> <p>価格は、堅調な動きとなり、安値で推移した前年を3割以上上回り、平年を1割以上上回った。</p>
葉茎菜類	 はくさい	<p>長野産中心の入荷があった。作付面積は前年並みで生育はおおむね順調だが、降雨の少ない地域では若干小玉傾向となっている。また、一部でアブラムシ類の媒介による病害の発生が散見される。総入荷量は、少なかった前年を2割近く下回り、平年を3割近く下回った。</p> <p>価格は、盆明け以降堅調に推移し、やや安値で推移した前年を1割強上回り、平年をかなりの程度上回った。</p>
	 キャベツ類	<p>群馬産中心の入荷があった。作付面積は前年並みで、若干遅延していた生育は回復傾向にある。高温の影響はあるものの、適度な降雨に恵まれ、生育は順調である。一部で、軟腐病などの病害が散見される。総入荷量は前年、平年ともやや下回った。</p> <p>価格は、全旬を通じて大きな動きはなく、前年、平年とも1割以上下回った。</p>
	 ほうれんそう	<p>栃木産、群馬産の高冷地中心の入荷があった。栃木産の作付面積は前年並みで、7月以降の高温の影響により生育は鈍化している。群馬産の作付面積は前年並みで、ハウス中心の生育はおおむね順調である。平地地では、秋冬作の圃場を準備中である。総入荷量は、少なかった前年をやや下回り、平年を1割以上下回った。</p> <p>価格は、品質も安定に向かい下旬に向け上げ、高めに推移した前年をやや下回り、平年を1割ほど上回った。</p>
	 ねぎ	<p>茨城産を中心に東北産、北海道産の入荷があった。茨城産の作付面積は前年並みで、気温高の影響で肥大が悪く、品質低下が散見される。東北産、北海道産は高温・干ばつの影響が大きく、生育が遅延し、肥大不足に加え、局地的な豪雨などから数量が伸びず、入荷も不安定である。また病虫害の発生も散見される。輸入の中国産は前年を3割近く上回っている。総入荷量は、前年並みであった前年を2割近く下回った。</p> <p>価格は、絶対量不足から中旬以降上昇し、やや高値で推移した前年を1割以上上回り、平年を2割近く上回った。</p>
	 レタス類	<p>長野産を中心に群馬産の入荷があった。長野産の作付面積は前年並みで、干ばつの影響からは回復し、生育はおおむね順調である。ただし、アザミウマなどの虫害の発生が前年より多く、気温の低い地域では結球不良が散見される。群馬産の作付面積は前年並みで、低温・干ばつの影響は解消されおおむね順調である。総入荷量はやや多かった前年を2割近く下回り、平年を1割以上下回った。</p> <p>価格は、中旬以降、下旬に向けて上がり、前年並みであった前年を2割以上上回った。</p>
果菜類	 きゅうり	<p>福島産を中心に岩手産、秋田産など、東北産中心の入荷があった。福島産の作付面積は前年並みで、7月中旬以降の記録的な高温・乾燥により樹勢が低下し、形状不良が多発し、虫害も多い。岩手産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調も、虫害が散見されるほか、樹勢の低下が見られる。秋田産の作付面積は前年並みで、気温の上昇に伴い生育は順調だが、急激な気温上昇による芯焼けや萎れ、べと病が散見され、また虫害の発生がやや多い。総入荷量は少なかった前年を1割近く下回り、平年を1割以上下回った。</p> <p>価格は、中旬以降上がり、高値で推移した前年は下回り、平年をかなりの程度上回った。</p>
	 なす	<p>群馬産を中心に栃木産、茨城産など関東産中心の入荷があった。群馬産の作付面積は前年をやや上回り、生育はおおむね順調も、高温・乾燥の影響で焼け、ボケ果、花落ちが見られるほか、病虫害も散見される。栃木産の作付面積は前年をやや下回り、高温・乾燥の影響での花落ちが散見されるがおおむね順調である。虫害が散見されるが、大きな影響はない。茨城産の作付面積は前年並みで、高温の影響により樹勢低下が散見される。総入荷量は少なかった前年をわずかに下回り、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>価格は、下旬に向けて上がり、高値で推移した前年を1割近く下回り、平年をかなりの程度上回った。</p>
	 トマト	<p>北海道産を中心に福島産、群馬産などの入荷があった。北海道産の作付面積は前年並みで、生育は順調だが高温による障害果が散見される。福島産の作付面積は前年並みで、高温の影響により樹勢が低下している。花落ち、花飛びに加え病害が増加しており、虫害の発生も増加傾向である。群馬産の作付面積は、前年をやや上回る。高温の影響による樹勢低下や花落ち、尻腐れ、裂果が散見される。一部で虫害の発生が見られる。総入荷量は少なかった前年をかなり大きく下回り、平年を2割以上下回った。</p> <p>価格は、下旬に高騰し、大幅な高値で推移した前年を2割近く上回り、平年を4割近く上回った。</p>

	ピーマン 	岩手産を中心に茨城産、福島産などの入荷があった。岩手産の作付面積は前年並みで、一部地域で高温・乾燥の影響による樹勢の低下、尻腐れの発生に加えて虫害も散見される。茨城産の作付面積は前年並みで、一部で高温障害が散見されるが、生育はおおむね順調である。福島産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調であるが、高温での尻腐れ、斑点病が散見される。総入荷量は、やや多かった前年を1割以上下回り、平年を1割強下回った。 価格は、前月からの高値は旬を追って落ち着いたものの、高値で推移した前年をわずかに上回り、平年を2割ほど上回った。
土物類	さといも 	千葉産中心の入荷があった。作付面積は前年を下回るが、生育はおおむね順調で、肥大も良好で病害も確認されていない。輸入の中国産は、前年を5割近く下回った。総入荷量は少なかった前年をかなりの程度下回り、平年を2割ほど下回った。 価格は、下旬に下がったものの、高値で推移した前年をかなりの程度上回り、平年を2割以上上回った。
	ばれいしょ 	北海道産中心の入荷があった。作付面積は前年並みで、生育は順調だが干ばつの影響により若干小玉傾向で、品質低下も散見された。関東産、九州産の残量が多かった。総入荷量は、少なかった前年を1割以上下回り、平年を2割近く下回った。 価格は、大きな動きはなく堅調に推移し、高値で推移した前年を2割近く下回り、平年を1割以上上回った。
	たまねぎ 	北海道産中心の入荷があった。作付面積は前年並みで、気温が高く日照に恵まれたが、干ばつの影響で小玉傾向である。輸入の中国産は前年を4割以上下回ったが、ニュージーランド産が増加している。総入荷量は、前年並みであった前年を1割以上下回った。 価格は、高値で推移した前年を1割以上下回り、平年をやや上回った。

(執筆者：東京シティ青果株式会社 平田 実)

(3) 大阪市中央卸売市場

大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、
入荷量は3万3386トン、前年同月比88.2%、

価格は1キログラム当たり290円、同103.1%
となった(表3)。

品目別の詳細については表4の通り。

表3 大阪市中央卸売市場の動向(8月速報)

品目	入荷量 (t)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	33,386	88.2	86.7	290	103.1	117.4	277	287	303
だいこん	1,946	87.1	75.0	124	108.0	112.3	100	117	154
にんじん	2,301	94.3	94.8	148	132.3	109.2	149	129	160
はくさい	2,349	81.6	84.8	108	105.5	109.9	81	130	111
キャベツ類	5,314	87.5	86.1	84	91.3	92.9	83	89	80
ほうれんそう	242	86.7	83.7	949	98.2	108.1	847	949	1,037
ねぎ	657	95.7	103.6	533	94.0	103.8	448	579	572
レタス類	1,742	88.4	87.2	240	126.1	132.3	203	239	275
きゅうり	1,778	95.3	90.9	396	91.1	111.8	317	400	458
なす	910	107.6	94.8	347	88.3	104.1	344	328	368
トマト	2,846	85.6	94.1	470	113.6	130.5	404	427	563
ピーマン	742	96.6	103.3	515	101.4	123.8	564	564	458
さといも	54	151.8	103.8	425	98.5	115.4	588	419	350
ばれいしょ	1,882	68.7	76.5	195	83.2	109.2	191	195	197
たまねぎ	3,568	84.8	78.2	139	90.0	112.0	143	137	136

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年比は過去5カ年(令和2~6年)平均との比較。

注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

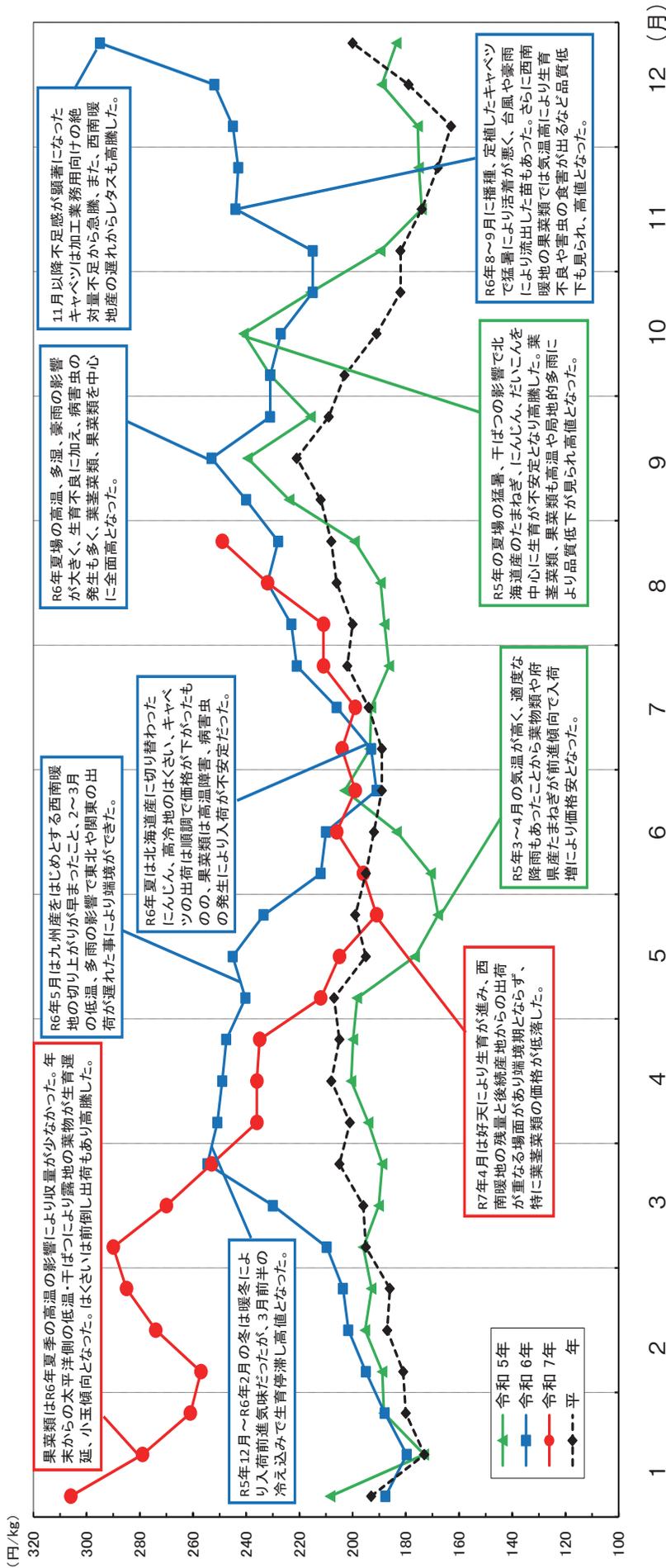
表4 品目別入荷量・価格の動向（大阪市中央卸売市場）

類別	品目	8月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん 	北海道産を中心に岐阜産や青森産の入荷があった。北海道産は気温高と干ばつの影響から作柄不良で、中旬以降に入荷量が激減した。岐阜産と青森産も入荷量が少ない状況が続く、月間全体では前年をかなり大きく下回り、平年を大幅に下回った。 価格は、不足感から旬を追うごとに上伸を続けた。月間の価格は前年をかなりの程度上回り、平年をかなり大きく上回った。
	にんじん 	北海道産が中心となる入荷であった。気温高と干ばつの影響で、産地出荷量が少ない状況が続いた。特に上中旬の入荷量が少なく、上旬では前年をかなり下回り、中旬には大幅に下回った。国産の品薄から業務関係で輸入の中国産にシフトしたため中国産の入荷が激増し、月間では前年の3倍以上の入荷量となった。月間全体の入荷量は、前年、平年ともやや下回った。 価格は、不足感から高騰して高値で推移し、月間では前年を3割以上上回り、平年をかなりの程度上回った。
葉茎菜類	はくさい 	長野産が中心となる入荷であった。上中旬は出荷増量が見込まれたが、気温高と干ばつで生育が進まず、結果的には入荷量は伸び悩んだ。月間全体の入荷量は、前年を2割近く下回り、平年をかなり大きく下回った。 気温が高く量販店の荷動きは悪い中で、連休前から加工筋の引き合いが高まったが、品薄感から中旬には価格が高騰した。下旬には落ち着いたが、入荷量が少ない状況の中で下げ止まった。価格は、月間では前年をやや上回り、平年をかなりの程度上回った。
	キャベツ類 	群馬産を中心として、主力の長野産の入荷もあった。上中旬は気温高と干ばつの影響で生育が悪く、また、玉肥りも悪く入荷量は伸び悩んだ。下旬には降雨から大玉サイズの比率が高まり、入荷増量したが、前年を大幅に下回った。月間全体では、前年、平年ともかなり大きく下回った。 入荷量が少ない中でも、気温高で消費が伸びず、価格は低迷を続けた。価格は月間では、前年、平年ともかなりの程度下回った。
	ほうれんそう 	岐阜産を中心とする入荷であった。関東の産地や北海道産は、気温高や干ばつの影響などから入荷量の少ない状況が続いたが、岐阜産は順調な入荷となった。月間全体の入荷量は前年をかなり大きく下回り、平年を大幅に下回った。 末端価格が高く、量販店の特売などが少なく、定番の販売が中心となり、全体としての見通しの悪さから、価格は旬を追うごとに上伸した。月間の価格は、前年をわずかに下回り、平年をかなりの程度上回った。
	ねぎ（白ねぎ） 	長野産と鳥取産が主体となり、北海道産の入荷もあった。各地とも潤沢な出回りで、安定した入荷が続いた。月間全体の入荷量は前年をやや上回った。 価格はお盆休み前の需要で上伸したが、平年並みの安定した価格で推移した。
	ねぎ（青ねぎ） 	青ねぎは香川産と徳島産が主体となる入荷で、細ねぎは静岡産と高知産が主体であった。各地とも産地出荷は順調であったが、気温高の影響で下位等級品の比率が高い状況が続いた。月間全体の入荷量は、前年をかなり上回った。 価格は、下位等級品が多かったことで低迷し、月間では前年を大きく下回った。
	レタス類 	玉レタスは長野産を中心とする入荷であったが、気温高と干ばつの影響で生育が悪く、産地出荷量は伸び悩んだ。入荷量も全旬を通じて伸び悩み、月間では少なかった前年をやや下回った。サニーレタスは長野産を中心とする入荷であったが、干ばつの影響から産地出荷量が伸びず、全旬とも入荷量が少ない状況が続いた。月間の入荷量は、前年をかなり下回った。リーフレタスも長野産を中心とする入荷で、玉レタスやサニーレタス同様、干ばつの影響で産地出荷量が伸びず、入荷量が少ない状況が続いた。レタス類全体の月間入荷量は前年、平年ともかなり大きく下回った。 価格は、絶対量不足から玉レタス、サニーレタス、リーフレタスとも高値で推移した。月間全体の価格は、前年を2割以上、平年を3割以上上回った。

果菜類	きゅうり 	<p>主力の福島産を中心に、北海道産や長野産などの入荷があった。各地とも極端な気温高の影響で生育も品質も悪く、産地出荷量が少ない状況が続いた。福島産の月間の入荷量は、前年をかなり下回った。月間全体でも前年をやや下回り、平年をかなりの程度下回った。</p> <p>商談単価は高く、量販店での特売需要も少なく引き合いが強まらなかったため、価格は伸び悩んだ。不足感から旬を追うごとに上伸ばしたものの、月間では前年をかなりの程度下回り、平年をかなり大きく上回った。</p>
	なす 	<p>千両系は群馬産を中心に京都産、徳島産も主体となり、他産地の入荷もあった。長なすは愛媛産が中心となる入荷であった。月の前半までは各地とも順調な入荷であったが、気温高の影響に加えて、成り疲れもあり盆明けに急減した。下旬には回復傾向となったが、入荷量は伸び悩んだ。月間全体の入荷量は、前年をかなりの程度上回り、平年をやや下回った。</p> <p>引き合いがあり、価格は堅調な推移となった。月間では、高値だった前年をかなり大きく下回り、平年をやや上回った。</p>
	トマト 	<p>岐阜産を中心に、この時期主力の岡山産、熊本産、愛媛産の入荷もあった。日中の気温は高いものの、盆明け頃から夜温の低下があり、着色が進まずに出荷量が減少した。また小玉傾向だったことも影響して入荷量は伸び悩んだ。月間全体の入荷量は、前年をかなり大きく下回り、平年をやや下回った。</p> <p>価格は、不足感から旬を追うごとに上伸傾向で、消費地では気温が高いことで需要は高く、引き合いも強かったことにより高値で推移した。月間では前年をかなり大きく上回り、平年を大幅に上回った。</p>
	ピーマン 	<p>宮崎産と愛媛産が主体となる入荷であった。月の前半は入荷量が少なく、盆明け以降に徐々に増量となったが伸び悩み、月間全体の入荷量は前年をやや下回り、平年をやや上回った。</p> <p>価格は、不足感から高値で推移し、下旬に入荷増量から下落はしたものの、月間では高値だった前年をわずかに上回り、平年を2割以上上回った。</p>
土物類	さといも 	<p>宮崎産の入荷であった。加工向けの需要が高く、盆用の需要もあったことから、中旬以降に大きく増量となった。輸入の中国産の入荷もあり、月間全体の入荷量は、前年の1.5倍となり、平年をやや上回った。</p> <p>引き合いが強い中でも仕入単価は安く、価格は伸び悩んだ。月間の価格は高値だった前年をわずかに下回り、平年をかなり大きく上回った。</p>
	ばれいしょ 	<p>丸芋は北海道産が中心となる入荷であったが、極端な気温高と干ばつの影響から生育不良となり、出荷の出遅れに加えて小玉傾向で、産地出荷量が少ない状況が続いた。月間の入荷量は前年を大きく下回った。メークインも北海道産が中心となる入荷であったが、気温高と干ばつの影響で出荷出遅れと小玉傾向となり、産地出荷量は少ない状況が続いた。ばれいしょ全体では、月間全体の入荷量は前年を3割以上、平年を2割以上下回った。</p> <p>価格は、小玉中心であったことと前年の高値の影響もあり、丸芋は月間では前年をかなり下回った。メークインも不足感から高値推移となったが、前年の単価高を受けて月間では前年をやや下回った。ばれいしょ全体では月間では、高値だった前年を大幅に下回り、平年をかなりの程度上回った。</p>
	たまねぎ 	<p>兵庫産と北海道産が主体となる入荷であった。北海道産は中旬以降に本格的な出荷がスタートしたが、極端な気温高と干ばつの影響から小玉傾向で入荷量は伸び悩み、月間の入荷量は前年を大幅に下回った。兵庫産は、貯蔵用ではない即売ものの歩留まりが悪く、産地出荷量が伸び悩んだ。月間全体の入荷量は、前年をかなり大きく下回り、平年を大幅に下回った。</p> <p>価格は、不足感から高値で推移したが、月間の価格は高値だった前年をかなりの程度下回り、平年をかなり大きく上回った。</p>

(執筆者：東果大阪株式会社 新開 茂樹)

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (東京都中央卸売市場)

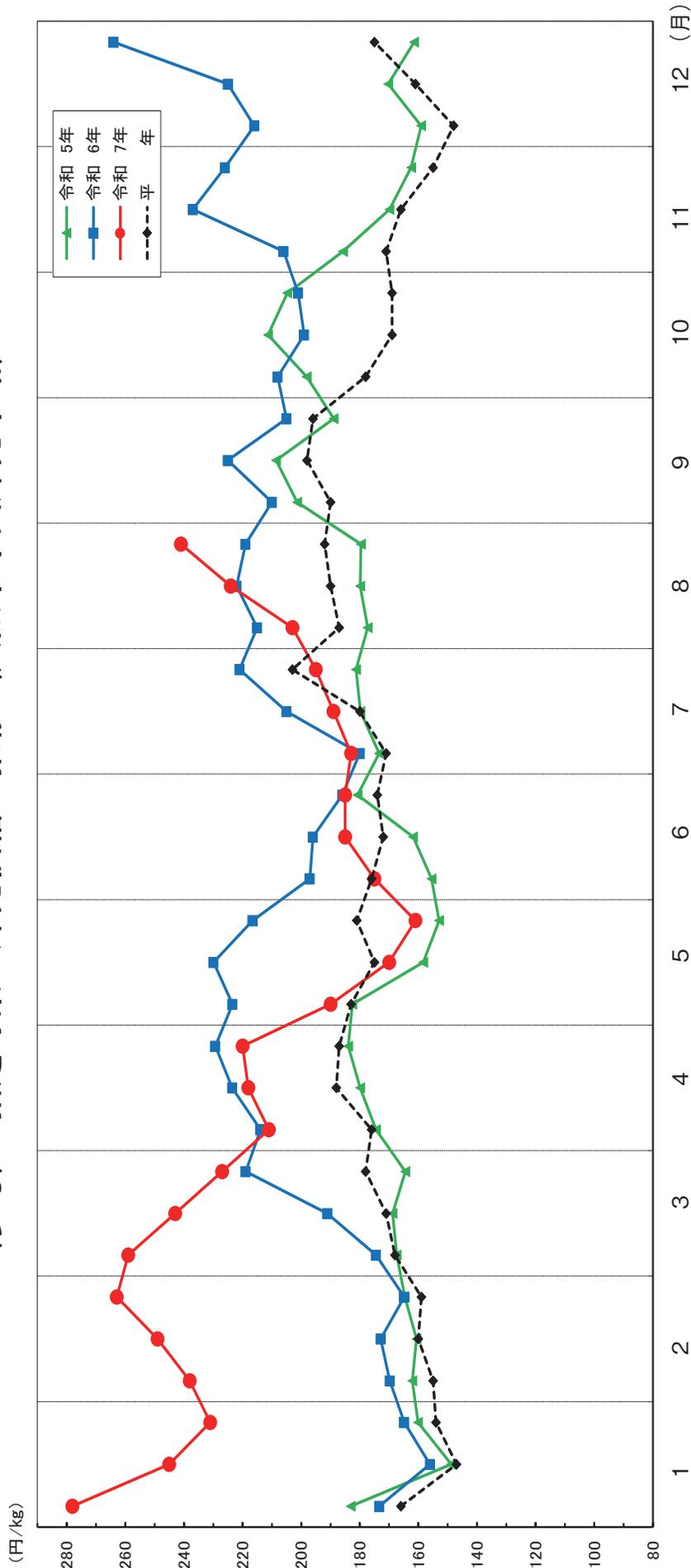


(単位：円/kg)

	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月														
	上旬	中旬																																			
令和5年	208	173	188	189	195	193	196	190	189	194	200	200	198	177	168	171	183	203	194	193	186	188	189	199	224	239	216	231	241	216	190	174	175	175	189	184	
令和6年	188	180	188	195	202	204	210	230	255	251	249	247	240	245	233	212	210	191	193	206	221	223	232	228	240	253	231	231	227	215	215	244	243	245	252	295	
令和7年	306	279	261	257	274	285	290	270	253	236	236	235	212	205	191	196	206	199	204	199	211	211	232	249													
平	193	173	180	181	187	186	195	196	205	201	208	205	207	195	199	195	192	189	189	194	202	200	206	208	212	221	209	203	191	182	174	168	163	179	200		

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」
 注1：平年とは、過去5力年(令和2年~6年)の旬別価格の平均値である。
 注2：豊洲市場、大田市場、豊島市場、定橋市場の4市場のデータである。

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (大阪市中央卸売市場)



(単位：円/kg)

	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月													
	上旬	中旬	下旬																																	
令和5年	183	149	160	162	161	165	167	169	165	174	180	184	182	158	153	162	181	173	180	181	177	180	180	201	209	189	198	211	205	186	170	162	159	170	161	
令和6年	173	156	165	170	173	165	174	191	219	214	224	229	223	230	217	197	186	180	205	221	215	222	219	210	225	205	208	199	201	206	237	226	216	225	264	
令和7年	278	245	231	238	249	263	259	243	227	211	218	220	190	170	161	175	185	183	189	195	203	224	241													
平年	166	147	154	155	160	159	168	171	178	176	188	187	183	175	181	176	172	174	171	180	203	187	190	192	190	198	196	178	169	169	171	166	155	148	161	175

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5力年（令和2年～6年）の旬別価格の平均値である。

注2：大阪本場及び大阪東部市場のデータである。